

おわりにかえて

スタッフ対談

東日本大震災の混乱の中で

井上 2011年3月11日、東日本大震災が起こった。混乱の中で、EPO東北は国の中間支援組織として一体何をすべきなのか。正直、分からなかった。スタッフ間で話し合い、EPO東北が情報を提供するプラットフォームの役割を担う事を目指してはどうかと検討した。

鈴木 地震から1週間は事務所を閉館した。開館後すぐにWeb-siteでの情報発信を始め、EPO東北とつながりのある皆さんの支援活動状況を発信した。次に、必要とされる支援物資やボランティア募集情報をEPO東北のWeb-siteに集約できないかと考えた。現実には午前中に集めたニーズが午後には変わってしまうほど事態は刻々と変わり、さらに被災範囲が広すぎて、すぐに情報受発信のプラットフォームは難しいと判断した。

井上 被災現場に行かなければ必要な情報は手に入らないと思った。最初に被災現場へ行ったのは地震から3週間後だ。これまで連携した事がある知り合いを訪ねて、気仙沼と石巻へ向かった。被災した現場を見て回り、話を聞いた。「歯ブラシが足りない」と声を上げれば、全国から次々に歯ブラシが届き、必要以上の支援物資が溢れている。目まぐるしく変わる被災地の現状にショックを受け、現地を見てもEPO東北として何をすべきなのか分からないままだった。非常時にEPOが担う役割の指針はない。地球環境パートナーシッププラザ（GEOC）から「この非常時の中でのEPO東北の動きは、全国各地のEPOの非常時対応の指針になるだろう」と言われ、プレッシャーを感じた。当時EPO東北の担当職員であった東北地方環境事務所の白迫正志さんを交えて事務局内で何度も話し合った。白迫さんから「被災された方々は自分の体験を話したいのではないだろうか」と提案があった。大変な体験をした人々が「話す」事で、感情や思考を整理できるのではないかと考えたそうだ。白迫さんの考えを聞いて、その通りではないかと感じた。

「3.11 あの時」の誕生

井上 EPO東北は環境分野を専門とする中間支援組織だ。環境活動に携わる方々に当時の様子や、震災を受けて感じている事、今後の活動についてヒアリングを行なう事に決めた。最初に、震災以前によく連絡を取り合っていた名取ハマボウフウの会の大橋信彦さんが頭に浮かんだ。壊滅的な被害を受けた名取市閑上に住んでいたため、安否も分からなかった。おそろおそろ電話をすると、ご本人が電話をとってくださった。すぐに会いに行く事になった。

三浦 井上さんと2人でヒアリングに向かう道中、何を聞いたらよいだろうか、心配りを十分にしようと話し合った。名取市役所で大橋さんにお会いすると、僕が想像していたよりも元気である様子が伺われた。

井上 意外と大橋さんが平然とした様子だったので、ヒアリングをしても大丈夫そうだと思わせてくれた。しかし、中には取材中に落泪する方もいた。口には出さなかったが、おそらくたくさん辛い現場を見たのだと思う。何を聞いたら良いのか、いけないのかをすごく考えた。その中でも、涙を浮かべながら「環境教育の意味を考え直さなければいけない」と仰った言葉が今も心に残っている。

三浦 あの取材は僕にとっても衝撃だった。

井上 この2件のヒアリングによって、「3.11 あの時」の両極を見た気がした。それからはヒアリングを受けてくださる方によって聞く内容を考えようと思った。事前に活動内容を調べ、質問事項を考えてからヒアリングにのぞんだ。ヒアリングを始めた当初は大震災の経験を後世に残そうなどという大それた考えはなく、EPO東北として何をすべきか分からない混乱の中で、藁にもすがりたい気持ちだった。EPO東北は環境省の公的な機関であり、民間団体が協働で運営しているためNPOのネットワークも持っている。この立場であるからこそ「3.11 あの時」ヒアリングはできたのだと思う。

鈴木 はじめからWeb-siteにヒアリングの簡単な報告を



掲載しようと考えていた。実際に話を聞くと、しっかりレポートにまとめて発信の方がよいと思った。2011年5月から掲載を始め、多くの方が読めるよう全国の各EPOのWeb-siteにリンクを貼ってもらい、メールマガジンでも発信をお願いした。最初のレポートは三浦さんが書いてくれたのだが、すごい勢いでかつ高いクオリティで書いてくださった。

三 浦 初めてのヒアリングだった事、震災が起こって1ヶ月しかたっていなかった事が手伝って力が入った。語り手の皆さんが訴えた事を読み手の皆さんに伝えるためにはどうしたらよいかを必死に考えた。

鈴 木 レポートは、現地に入るボランティアにとって事前情報として非常に参考になるので続けてほしいと、全国から好評だった。現地の状況と、話して下さる皆さんの抱えている想いが、全国の多くの方に伝わってほしいと思いを込めてレポートを書いている。

井 上 面と向かって話をする事で、語り手の皆さんの感情を感じ取る事ができる。考え方は十人十色だ。それぞれの感じた事や考えた事が大事であり、「想い」や「気持ち」の部分をきちんと伝えていかなければならないと思っている。ヒアリングを続ける中でEPO東北の「伝える」使命に気づき、後世の人に残したいという想いが生まれた。後世の人々が「3.11あの時」を読んだ時に、何かを感じてほしいと思う。

「3.11あの時」が果たした役割

井 上 EPO東北のネットワークは「3.11あの時」ヒアリングを通して一気に広がった。震災の共通体験を共有する事で、気心が知れる。このヒアリングはつながりを作り、ネットワークを広げる重要な手立てになると感じた。

鈴 木 基本的にスタッフ2人1組でヒアリングを行なった。1人が聞き役、もう1人は写真撮影と記録役に分担した。EPO東北のスタッフは特異な形で震災を経験していると思う。ご本人からお話を直接聞

き、起稿のために録音データでもう一度お話を聞く。書いたレポートを再度チェックしてから、スタッフ同士でさらに確認し合う。最終的にご本人の確認を取り、レポートをWeb-siteに掲載するまでに少なくとも5回は話を聞いて、読む事になる。他にはない特殊な震災経験だ。

井 上 お話を聞いた後に現地に連れて行ってもらう事もあった。同じ体験はしていないけれども、実際に現地を見る事で、ある意味その体験に近づく事ができる。荒涼とした情景に立ってはじめて、震災が現実なのだと思知らされる。震災直後から被災地を訪れてお話を聞くようになり、EPO東北の仕事は現地に入る事だと思うようになった。このヒアリングがなければ、東日本大震災や東北について自分の言葉で語れるようにはならなかっただろう。この活動を通して、自信を持つ事ができた。

鈴 木 全国のEPOのスタッフがEPO東北を気遣ってくれていた。EPOネットワークのメーリングリストに「3.11あの時」の情報を流すと、必ず四国EPOから応援のメッセージが来て、とても嬉しかった。震災後、連絡が取れず津波の犠牲になってしまったと思われていた方の安否確認ができたなど、思わぬところでも役立つ事ができたらしい。このレポートがきっかけでメディアや学生が取材に来たなどの事後談は、多くの方に読まれていて、さらに大事な情報源になった証でもある。EPO東北は現地の情報を伝えるスピーカーの役割を担う事ができたのだと感じた。

井 上 僕はEPO九州から「震災を受けて東北はどうするのだろうか」と見ていたが、「3.11あの時」はまさに緊急時にEPOがどのような役割を担うべきかの指針を示してくれた」と言われた事が、とても嬉しくて印象に残っている。

鈴 木 多くの方からの冊子化すべきだとの後押しもあり、2011年度末に冊子化が決定した。冊子化は本当に大変だった。レポートを読み返すと誤字や脱字、読みづらい箇所がたくさんあった。校正のために何度レポートを読んだのだろうか。完成後は、ヒアリングを受けてくださった方々に冊子を届けに行



き、各地方EPOを通して全国に配布した。

井上 「3.11あの時」があったからこそ、持続可能な社会に対するEPO東北の考え方が共有されたと言える。全国各地から2012年度もレポートを続けてほしいとの声が届いた。1年目のヒアリングでいろいろな団体が被災地へ来ている事が分かったので、2年目は被災3県だけではなく、支援拠点となった山形や秋田など隣県での動きをヒアリングしてこうと方針を立てた。落ち着いてきた事で、誰にヒアリングを行なうべきかが見えてきた。また、2年目のレポートは非常に濃い内容になっていると思う。1年目は全てが混乱していた様子が伺えるレポートになったが、2年目は震災を受けての考察や人生観が伝わってくる。

鈴木 1年目はまだ心の整理もついでない状態でヒアリングに応じていただいた。震災から1年がたち、心が整理され、話したい事がたくさん出てきたのだと思う。

小山田 私は「3.11あの時 stage2012」から関わっている。初ヒアリングで訪れた石巻で初めて被災した現場を見た時はかなり衝撃的だった。ヒアリング先で「(被災地を)見るべきだと思う」と言われ、実際に現場を見て感じる事が有ると実感した。中でも印象的だったのは、津波を経験した方が「この地域から新たなライフスタイルや価値観の提案をしていきたい」と仰っていた事だ。津波を経験した方だからこそ言える言葉なのだろうと思った。

井上 大変な経験をして、その上で仰る言葉には大きなインパクトがある。「自然の許容する範囲でしか人間の暮らしはないのだ」という言葉は、環境の根源を示していると思った。

ヒアリングを振り返って

井上 特に印象に残っているヒアリングはあるか。

岡崎 「3.11あの時 stage2013」から関わり、1年間ヒアリングをしてきて特別に印象に残っている方はいない。それはヒアリングを受けてくださったす



べての方に圧倒され、衝撃を受けたからだ。しっかりと震災に向き合っていて尊敬する反面、大変な経験をなさっていて悲しいような複雑な気分になる時もあった。2011年度当時のスタッフの大変さが伺える。

三浦 辛く重い題材の取り組みだったけれど使命感が上回った。ヒアリングの待ち合わせ場所に近づくと気が引き締まる。

荻野 私は震災当時、秋田から新潟へ車で移動中だった。コンビニエンスストアへ行っても停電でレジが使えないため販売を中止していて、ご飯を食べる事ができなかった。けれども新潟では次の日には普段と何も変わらない生活を送る事ができた。私にとって東日本大震災はここで終わっていた。2013年6月、EPO東北のスタッフになって「3.11あの時」を読んでも実感が持てなかった。現地を訪れ更地になってしまった場所を見ても、以前の風景が分からないので、前からこの状態だったのではないかと思ってしまう。そんな中、「3.11あの時 stage2013」のヒアリングを通して、皆さんが本当に土地を愛していて、その土地をよくしたいと心から思う気持ちを感じた。それからは「3.11あの時」を友人・知人に紹介している。私のように震災で大きな被害を受けていない方に、土地を愛して頑張っている方がいる事を知ってほしいと思ったからだ。3冊目には私がヒアリングしたレポートが掲載されるので、これからはヒアリングを受けてくださった方々の気持ちとあわせて、震



災が完結してしまっている方に被災地の現状を伝えたい。

三 浦 土地を愛している。それは皆さん共通していると僕もヒアリングを通して感じた。

小山田 私も2012年度から関わるようになり、最初は荻野さんのように現実味がなかった。EPO東北に配属された時、井上さんに「持続可能な社会とは何ですか」と質問した事がある。最後に井上さんは「持続可能な社会は人によって表し方が違うと思う」と教えてくれた。自分自身の言葉を見つけていく必要があると思った。ヒアリングを通して、震災について考え、多くの気づきを得て、それが少しずつ見えてきたと感じる。人は自然がないと生きられない。これまでと同じ社会でよいのかと皆が考え直し始めていて、地域には将来を担う若者が必要とされている。2年間のヒアリングを通して、世代を超える縦のパートナーシップが持続可能な社会につながるのではないかと学んだ。震災をきっかけに東北から新しい価値観やまちづくりのモデルを発信していこうと頑張る方々のお手伝いをする事がEPOの取り組むべき事ではないかと感じている。

鈴木 私は3年間のヒアリングで、言葉の重みを感じた。レポートを読む方に、話して下さった皆さんの言葉をきちんと伝えたいと思った。EPO東北が「伝える」役割を担う事の大切さを感じながら取り組んでいたのも、ラジオパーソナリティーなど情報を伝える事を生業にしている方のお話は多くの部分で共感した。ある方が「当時の出来事と向き合えるようになるまでに1年かかった」と仰っていた。私も1年間がむしゃらに取り組んできたので、かえって「あの時」に正面から向き合えない面があった。多くの現場を見聞きして、「3.11」を意識し続けたからこそ、「あの時」を振り返る事はできなかった。

井 上 「3.11あの時」はがむしゃらに取り組んだが、結果的には非常に良かった。本来は目的を決めてから走り出すものだが、走りながら取り組んで結果がついてくる事もあると分かった。

三 浦 1年目の最初のヒアリングは今でも記憶に残っている。自分では力作だと思うレポートができて他のスタッフに直されてへこむ事もあったが、井上さんに「三浦さんの記事は想いが込められている」と励ましていただいて、次も頑張ろうと自分を奮い立たせた。ヒアリングを重ねる中で、相手に心配りをして話を聞かなければならないと気づいた。人によって状況も語り方も違う。また、人間は辛く苦しい時にかっこいい事は言わず、むしろ本音が出るのだと学んだ。ヒアリングを受けてくださった方々とのつながりは僕の財産だ。すごく良い仕事をした。

井 上 僕はこの3年間のヒアリングを通して、スタッフの力がとても大きかったと感じている。仲間がいたから「3.11あの時」は3年間続ける事ができた。一番混乱していた時期に被災地へ向かった三浦さん、素晴らしい文章力や構成力のある鈴木さん、——誰か1人が欠けても成立しなかった。仕事は1人で抱えると辛いし大変だと思う。EPO東北がチーム体制で運営しているのは、スタッフを大事にしていきたいからだ。僕も皆に助けられ、支えられている。スタッフそれぞれの感性を大事にしていかなければならないと感じた。3年間を振り返って出てくるのは、感謝の気持ちだ。これからもスタッフを大事にしたい。「3.11あの時」で直接現地に伺ってお話を伺う事は大事だと学んだので、ヒアリングはEPO東北のスタイルとして継続したいと考えている。今後ともよろしくお願いします。

全 員 よろしく申し上げます。おつかれさまでした。

井 上 郡 康
三 浦 純
鈴 木 美紀子
小山田 陽 奈
岡 崎 優
荻 野 由 佳